ラグビー校のフットボール・ルールから「ラグビー精神」をみる

溝畑　寛治

キーワード：ラグビー校，フットボール，ルール，精神

はじめに

子どもの遊びには、それぞれルールがあり、おもしろさが薄れてくると楽しい方向にむけて新たなルールを作り出す。スポーツにおける各種競技のルールも、それぞれに競技を楽しくする目的でルールが構成されている。そこにはただ単に楽しさだけに留まらず、それぞれの時代における人間社会を背景とする思想や社会観があり、それぞれのスポーツを愛好してきた人達のスポーツ観等が折込まれている。なぜこのようなルールがあるのかと思うことが多々あるスポーツのルールであるが、子どもの遊びからさらに発展しスポーツのルールとして認知されたものを探りあてることもスポーツマンにとって興味深いことである。

ラグビーでは、ラグビー発祥の地といわれているラグビー校でのフットボールのルールブックが最古のルールブックとして受け継がれているが、ここにも当時のパブリックスクールを取りまく英国の教育背景や社会背景の下に教育の一環として取り入れられたスポーツの時代背景がある。もともと、イングランド各地で行われていた民族遊びであったフットボールは、ほとんどルールらしいものはなくレフリーも存在せず、それぞれの町や村のやり方によって行われていた。ラグビー校で行われていたフットボールも無秩序なものであった。しかし、ラグビー校の校長であったアーノルドは、フットボールをコントロールされた秩序あるスポーツにするため、リーダー格の生徒（監督生）たちにルールを整備するように指示してラグビー校独自のものを作り上げたと言われている。このようにアーノルドは、スポーツを教育の一環として取り入れて大成功を治めた一人である。本稿では、ラグビー校で作られたフットボールのルールを探りつつ、ラグビーフットボールというスポーツがどのような背景で生まれ育ってきたか等について考察しながら「ラグビー精神」について探ってみたい。

Ⅰ．ラグビー校におけるフットボール・ルール

1845年8月28日の日付で以下の規則は、ラグビー校にて行われるフットボールに関する法律として中等後半部生による接見において認可された。とある。そしていわゆる条文に入る前に、決議として、諸注意的な文章が述べられている。

「決議」

●出席点呼が済んでから試合が終わるまで、選手がクロース（競技場：当時はそう呼ばれていた）を出ることができるのは、特別な場合で、しかも両チームの頭（頭＝当時は未だキャプテンと呼ばれていなかった）

の許可された場合だけである。そして試合の服装への着替えは、出席点呼までにしておかなければならないものとする。

●みだりに試合を欠席したものは処罰される。処罰は監督生の裁量に一任されている。

●試合が行われる場合は、当日の昼食時間までに、主席生（監督生のリーダーで学校の代表をつとめる）が、全校生にその旨を報告しなければならない。

●試合の開始時刻には、みだりに遅れないこと、出席点呼後、直ちに試合を開始する。

●同一週に2試合以上試合をしてはいけない。しかもそのうちの1試合は、かならず土曜日に行うこと。

●ボールを絶えず追いかけること（フォローアップ）を怠ってはならない。プレーには全力を尽くし、自己の労を省いて味方の戦力をそぐような行為をしてはならない。

●上級生が要求した奉仕などを口実として、試合を逃れようとする行為は認められず、保健所員の証明がある病気による欠席届のみが認められる。

●試合点呼の際、やむを得ず遅れる事があっても、できるだけ速やかに参加する事。

●主席生は、上記の決議を全校生に周知徹底させること。大規模チームによる試合の場合にも適用されるよう努力する事。

●本校の卒業生も試合に参加する事ができる。ただし、両チームの頭（キャプテン）の同意が必要である。

以上のように競技規則に入る前に試合にのぞむにあたっての心構えをしっかりと持たせているところに教育的配慮がなされていることがわかる。

注：1、パブリックスクールは、年齢12、3歳～18、9歳で、在学期間4年～6年となっていた。中等後半部生とは、最上級生を意味しているとおもわれる。

注：2、この頃のラグビー校では、「ビック・サイド」という全校生を2チームに分けた大規模な試合と、「リットル・サイド」という寄宿舎同士の試合があったようである。

注：3、当時のラグビー校での試合をトーマス・ヒューズ著「トム・ブラウンの学校生活」(1857年刊）から推察すると、相手側インゴール（ザ・アイランド、島と言っていた）にボールをグランディング（トライ）すると、ゴールキックの権利が得られる。そしてプレースキックでゴール（コンバート）に成功すると得点が得られる。当時のトライは、まさしくゴールキックを試みる権利を得たということであった。双方が2ゴールを得た時に試合が終了する。そのためなかなか試合は終了せず延々と続くことが普通であったようである。試合を進めるにあたって次のような規則が作られている。

「規則集」

1. 「フェアキャッチ」とは、キックされたボールを直接キャッチすることである。
2. 「オフサイド」とは、自分より後方にいる味方のプレーヤーにボールが触れた場合、そのプレーヤーは相手側がそのボールに触れるまではプレーをしてはならない。(注：サイドとは、チームのことで、オフサイドはチームから離れている選手の意味である）
3. 「ファースト・オブ・ヒズ・サイド」とは、自チームのうちボールに最も近い位置にいる選手のことを指す。
4. 「スロー・オン」に対して「ノック・オン」とは、腕または掌に当ててボールを前方に進める（落とす）事である。
5. 「トライ・アット・ゴール」トライ後のゴールキックは、プレースキックで、誰

にも触れることなくゴールのクロスバーを両ポストの内側を通るように越えなければならない。

6. 「キック・オフ」キック・オフは、中央からプレースキックで行なわなければならない。

7. 「キック・アウト」（タッチキック？）は、プレースキックならば、自陣ゴールラインから10ヤード以内から、パント、ドロップならば25ヤード以内の地点から行なわなければならない。

8. 「ランニングイン」ボールを持って相手インゴールに走り込み、グランディングする行為は、ボールを地面から拾い上げるか、タッチラインを越えて持っていかない限りどの選手にも許される。

9. 「チャージング」チャージすることが、許されるのはプレースキックの場合には、ボールが地面に触れてから、そしてキャッチに引き続くキックの場合なら、キッカーの足が地面から離れた瞬間に行ってよい。

10. 「オフサイド」オフサイドであるプレーヤーは、何事が起こってもボールをキックしてはならない。

11. オフサイドである間は、ハッキング、チャージ、ラン・インしたり、ゴールラインを越えてのタッチを行ったり、キャッチを妨げたりしてはならない。

12. ある選手がオフサイドであるのに、フェアキャッチをした場合、その選手にはフェアなノック・オンをする権利が生じる。

13. タッチにあるボール以外は、地上にあるボールを手で触れてはならない。

14. オフサイドになっている選手は、ボールをスロー・オンしたりノック・オンしたりすることによって、自らまたは他の選手をオンサイドにすることは認められない。

15. 「タッチ」タッチの外、またはタッチを通るようにボールを持って走る事は出来ない。

16. 敵側の選手と対抗している選手は、その相手の片腕しか掴んではならない。一方、相手がボールを蹴ろうとしたり、タッチラインを越えようとしたりすれば、その相手をハックして、或いはノックによってボールを落とさせてもよい。

17. ビッグ・サイドの試合において両チームの選手の間で、ボールを真っ直ぐ送り出すような合意は認められない。

18. クロース周辺の並木の一本を目指してタッチに入り、その木の幹をボールで触れてから自陣の方向へならば木のどちら側からでもキックしても良い。

19. タッチからボールを入れる場合は、真っ直ぐに入れなければならない。

20. 5日間も続いた試合は総て引き分けとされるが、ゴールが一回も蹴られていなければその試合を引き分けと見做すのは、3日目の暮れである。

21. ビッグ・サイドの試合の間は、クロースにボールを2個用意しておかなければならない。

22. ゴールキーパーを選ぶ権利は、両チームの頭（キャプテン）、或いは主席生にある。

23. 恒例の中等後半生の試合までは、クロースのゴール2箇所の間の領域を使ってフットボールを行なってはならない。

24. 試合の結果などについての総ての論争・喧嘩などの裁決の全権を有するのは、チームの頭（キャプテン）、或いはそれによって任命された代理人である。

25. どの試合であっても、よそ者の選手には、ゴールを狙うことはできない。

26. 相手の足を蹴る場合、踵を使ったり、膝から上を狙うのはアンフェアーとされる。

27. スクラメージの最中を除けば、チームの先端を走っている選手以外の脛をハックしてはならない。

28. どの選手でも、突き出た釘や板金を履物の裏側に付けてはならない。
29. 試合中どの選手も、ボールをクロースの外へ持ち出してはならない。
30. どの選手も、ボールを止めるにあたっては、自らの身体以外のものを使用してはならない。
31. 主席生の許可がなければ、試合中にキャップをかぶったり、セーターを着てはいけない。
32. ビッグ・サイドの際、コインによるトスは、全校における地位が高いものが行う。
33. 「島」（ザ・アイランド　すなわちインゴール）は、全領域、いわばデッドボールライン内とみなす。
34. リトル・サイドの際、ゴールの幅は4歩とし、ゴールの条件はどの選手の手もボールに届かないことである。
35. 監督生が3人出場している試合は、ビックゲームとみなす。
36. ある選手が不当にボールをパントした場合、反対側の選手にパントやドロップ・キックが許される。
37. どの選手も、ボールを手に持っていなければその選手の片腕を捕まえてはならない。

上記の規則がフットボールの法則になっているので、フットボールに関心のあるものは総てその厳守を実施するよう可能なだけ尽力することが期待される。（A・S・ギブス、溝畑寛治共訳　2007　フットボール・ルール　ラグビー校）

Ⅱ．パブリックスクールについて

フットボールのルールを理解するに当たって、当時のパブリックスクールの様子などを知っておくことが必要である。かつてイギリスでは、上流階級の子供の教育は、家庭教師に委ねられていたところがある。しかし14～15世紀ごろ、僧院が教育のために開放されたことにより私人たちにより私財を投入され経営されるようになった。全寮制でイギリス支配階級の子弟がたくさん入り、エリートの学校として発展していった。いわゆるパブリックスクールが出来たのである。パブリックの意味は、公立ではなく、公共の意味でありオックスフォードやケンブリッジ大学に行くためのエリート私立なのである。ここでは校長に対しての絶対服従、校則や規律を守ること、宗教行事や運動競技への強制参加。また寮での生活も厳しく、身なりについても気を配り「紳士の国」として忍耐強い肉体と精神力を養う教育が行われていた。このような厳しさへの反発からか18世紀～19世紀のパブリックスクールでは、上級生による下級生いじめが多発し、校内の規律も乱れていた。プリーフェクト＝ファギング制度という、監督生（プリーフェクト）を中心にして、最上級生が下級生（ファグ）を支配する制度は、当時、校長や教師でも対抗できなかったといわれている。この改革として行われたのがフットボールやクリケットの試合であり、ルールによって統御されて規律を守ることで秩序を確立しようとしたのである。このようなパブリックスクールを改革する中心人物であったのがラグビー校の校長トマス・アーノルドである。アーノルドは、キリスト教に基礎をおいた宗教的、道徳的な人格教育を重視し、この制度を正式に認めて最上級生の中から監督生にふさわしい生徒を選んで任命し、監督生としての責任を自覚させた。その結果、自覚を促された監督生は、エリート的な存在となり下級生に対して「クリスチャン・ジェントルマン」として道徳的規範を示すようになった。またアーノルドは、スポーツの有用性に着目し、狩猟や射撃をやめて団体スポーツを奨励した。特に勇敢さ、協調性、献身などを養うにはチームで行うスポーツが良く、生徒たちの人格陶冶にとフットボールやクリケットをとおして

心身を鍛錬するようになったのである。また試合で行うプレーは、フェアでなければならないことから、ルールが整備されていった。チームワークやフェアプレーとともに重要視されていたのが、キャプテンのあり方を学ぶことである。当時は、現在のように監督やコーチという制度も確立されておらず、頭（キャプテン）が選手の起用から戦術、戦法、作戦まで総てを担っていた。それだけ責任もあり、権威もあることから、今でもラグビー界では、「キャプテンシー」といわれキャプテンの価値は高く評価されている。ラグビー校で行われていたフットボールが前述したような経緯を経てラグビーとして発展してきたのである。

Ⅲ．ＩＲＢラグビー憲章について

前述したラグビー校におけるフットボールのルールと現在のラグビー競技規則との比較によって「ラグビー精神」を探ってみることから、平成18年度の競技規則に目をむけてみた。競技規則には、前文にＩＲＢラグビー憲章　PLAYING CHARTERが次のように示されている。

序　文

ＩＲＢはラグビーの基本原則を定めるラグビー憲章（Playing Charter）をここに制定する。この憲章は、すべての協会に原案に対しコメントをする機会を与えた後に承認したものである。その目的は、ラグビーの競技方法に対して、ある一定のチェックリストを設けることにある。これは同時にラグビーがもつ独自の特性を失わせないためのものでもある。

プレーとコーチングに適応するラグビーの原則に付け加え、2つの新しいチェックリストを追加した。競技規則の適用（レフリング）、と競技規則制定に関してである。

ラグビー憲章の存在はラグビーに大きな恵みをもたらすものとなるであろう。ラグビー憲章に照らし合わせることにより、あらゆる基準が明確になる。そして、このことが根拠の曖昧な変更を防ぐことにつながり、いかなる変更も、ラグビー独自の特性との一貫性を持つことになるからである。

したがって、ラグビー憲章は、ラグビーとは何かを説明する競技規則を補う重要な性格を担うものであり、プレーヤー、コーチ、レフリー、そして競技規則を制定するものに、一定の規範を示すものとなる。

目　次

1. ラグビーの目的
2. ラグビーの原則
3. 競技規則適用の原則
4. 競技規則制定の原則

1. ラグビーの目的
The object of The game

ラグビーの目的は、それぞれ15名、10名、または7名からなる2つのチームが、競技規則およびスポーツ精神に則り、フェアプレーに終始し、ボールを持って走り、パス、キックおよびグランディングして、できる限り得点を多くあげることであり、より多くの得点をしたチームがその試合の勝者となる。

解　説

ラグビーの目的を達成するためには、2つの基本原則がある。1つはボールの争奪（contesting possession）であり、もう1つはプレーの継続（maintaining continuity）である。

これらはボールを用いるチームスポーツが共通して持つ特質であり、ボールを保持しているチーム（攻撃している側）の目的は得点をあげることを目指し、ボールを保持していないチーム（防御している側）は、ボールを再獲得して攻撃し得点をあげることを目指す。しかしラグビーは他のスポーツとその競技方法において以下の点で異なる。

（ｉ）手も足も両方使うことができる。

（ii）プレーヤーはボールを持って自由に走

ることができる。

（iii）防御方法にも、安全性を損なわない限り、制約がない。

（iv）ゴールラインを超えてボールを持ち込むことによって得点となる。

（v）ボールは後方に位置する味方のプレーヤーにのみパスをすることができる。

（vi）攻撃している側のプレーヤーは、味方チームのボールキャリアーより後方の位置からのみプレーに参加できる。

（vii）攻撃できるスペースの創出は、ボール獲得・保持・再獲得といったチームのスキルによって左右される。

ラグビーには上記のような特性があり、これらによってラグビーは独自の特性を持つスポーツとなっている。2つの基本原則のうちの1つで、ラグビー独特の特性であるボールの争奪とは、キックによる開始と再開、スクラム、ラインアウト、ラック、モール、そしてタックルで行われる．もう1つのプレーの継続とは、ボールをパスしたり、持って走ったり、キックしたりすることや、ラックおよびモールを形成することによってである。

2．ラグビーの原則 The Principles of The Game

解　説

ラグビーの原則はラグビーの根幹をなす理念である。ラグビー競技に参加するものは、この原則により、ラグビーが他のスポーツとは一線を画す特性を持つということを直ちに認識できることになる。ラグビーの試合は次の原則に基づくものである。

ボールの争奪　Contests for Possession

ボールの争奪はラグビーの持つ主要原則である。この争奪は試合中のあらゆる局面で行われる。争奪は、コンタクトプレーや一般プレー、そしてスクラム、ラインアウト、キックによる開始、再開の場面で発生する。これらの争奪は、どちらのチームにも公平なものでなければならないが、その直前のプレーで、スキルのクオリティが優っていた側に有利となる。例えば、プレーを継続するスキルが未熟なためにボールをタッチに出したチームには、ラインアウトでの投入権は与えられず、また、ボールを前方に落としたり、パスをしたりすれば、次のスクラムにおいてプットインができないということである。

攻撃／プレーの継続　Attack Continuity of Play

ボールを獲得したチームは、フィールドオブプレー内の横のスペース、および自チームと相手チームとの間の縦のスペース両方を活用して、ボールをパスしたり、前に持って走ったり、キックしたりして攻撃を行う。攻撃している側（ボール保持チーム）の目的は、相手チームのボール獲得を阻止し、ボールを前方へ動かすスキルを駆使することより、プレーを継続し得点をあげることである。プレーの継続には、前進が一時的に停止したときに行われる再編成（ラック・モール）が含まれる。これにより、ボール保持チームは横のスペースと相手チームとの間の縦のスペースを再び作り出し、攻撃の継続が可能になる。

防御／ボールの再獲得
Defence／Regaining　Possession

いったんボールを失えば、ボールを保持していない側はまず、攻撃している相手側にボールを用いるスペースと時間を与えないようにして、相手側が前進するのを防ごうとする。最終的な目的は、ボールを再獲得し、攻撃をして得点をあげることである。防禦の役割とは、ボールを再獲得して、攻撃することによってプレーを継続することである。

多用性　A Multi-Faceted Game

上記３つの原則の総合的な結果として、さまざまな局面が試合の中で創出される。プレーヤーは、広範囲にわたる個人スキルや集団スキルを発揮し、色々な人数のグループを形成して、総合的にプレーができる。このようにスキルが多様性に富むため、様々な能力・身体的特性をもつプレーヤーが1つのチームの中で一緒にプレーすることが可能となる。プレーヤーは共通のスキルを持つ一方、ラグビーが多面性を持つという性質上、個々のプレーヤーの能力差に関わりなく、各自の才能に最も適したポジショナルスキルを専門的に習得することもできる。

報奨と罰　Rewards and Punishments

ラグビーの競技方法では、その目的と原則を有効に活用することができるチームが相手側より有利になる。スキルを駆使するための時間とスペースが多い側が有利に試合を展開することからも理解できよう。プレーの開始時点で、ボールを獲得して攻撃している側には、ラグビーの目的を達成できるような十分なスペースが当然与えられる。

3. 競技規則適用（レフリング）の原則 The Principles of Law Application (Refereeing)

ラグビーの目的と原則　The Object and Principles of Rugby

ラグビーの目的を達成するために、そしてここに記されているようなラグビーの原則のもとでラグビーがプレーされることを保証するために競技規則は適用されなければならない。

公正性　Fairness

ラグビーの目的に応じてスキルフルでポジティブなプレーに対しては報償を、目的に反するプレーに対しては罰をという考えに基づいて、競技規則は適用されなければならない。

一貫性　Consistency

競技規則の適用には一貫性がなければならない。

アドバンテージ　Advantage

プレーを継続するためにアドバンテージが適用されなければならない。しかし、継続する中で攻撃のオプションが大幅に制限されたり、反則が重なれば、違反したプレーに該当するルールを適用する。アドバンテージルールへの適用に当たっては、プレーの質の低下や、プレーヤーの安全性が失われることにつながることがあってはならない。

優先順位　Priorities

プレーヤーの安全性確保に第一の優先順位を置く。次に、プレーの継続に優先順位を置く。このためにはアドバンテージルールの適用が必要となる。

マッチオフィシャルのゲームマネジメント Management of the Game by Match officials

これについてはトップレベルでのみ適用となる。マッチオフィシャルが1つのチームとして機能するように、レフリーはルールを適用しなけれればならない。

適用　Application

ここに述べた競技規則適用の原則は必ず守らなければならない。そうすることによってはじめて、ラグビーの目的に沿ったプレーが行われる。

4．競技規則設定の原則　The Principles of Rugby Law Making

競技規則設定の原則は、競技規則を設定するものに、ラグビーの原則を正しく表す競技規則を作成するための枠組みを提供するためにある。

競技規則は次の原則に基づいて設定される。

安全性　Safety

競技規則にしたがってプレーしているすべてのプレーヤーに対して、競技規則自体が保護を与えるものでなければならない。

平等な参加機会　Equal Opportunity to Participate

競技規則は、体格、スキル、性別、年齢、競技にかける意欲など、それぞれによって異なるプレーヤーがその能力のレベルに応じて、安全で、競い合い、かつ楽しめる環境の中でプレーできるようにするものでなければならない。

独自性の維持　Retention of Identities

ラグビーは独自の特性を数多く持ち、これらの独自性は失われてはならない。

（ｉ）ボールの争奪
Contests for Possession
●プレーの開始時と再開時において
・キックによる開始と再開
・ラインアウト
・スクラム
●ラック、モールを含む一般プレーの中で

（ii）攻撃　Attack
相手チームのゴールラインに向かってボールを動かすスキルには、ランニング、パス、キックなどがある。このうち最も特徴的な独自性は、パスを前に投げることができないことである。これは他のスポーツにはほとんど見られない特徴である。したがって、ボールを先進させることができる他の方法としては、ボールを持って走ったり、キックを行うことに限られる。

（iii）防御　Defence
タックルをしてボールを再獲得するスキルは、ラグビーにおける防御に関する主要な独自性である。競技規則は、スキルの劣っている側の攻撃に対して、その時間とスペースを奪い、プレッシャーを与えるという防御のプレーを可能にするものでなければならない。

プレーの継続　Continuity of Play

プレーの継続に関連した独自性としては、ラックとモールがある。

これらの独自性とは、攻撃している側（ボール保持チーム）が、得点をするまでには至らなくとも、ボール保持を継続し、もう一度攻撃を再構成しなおすことを可能にする方法のことである。ラック・モールを形成することで、攻撃している側は、横のスペースと相手チームとの間の縦のスペースを再び生み出すことができる。また、そうすることによって、攻撃を継続するために必要な時間を得ることができる。

プレーする喜びと観る楽しさ
Enjoyment and Entertainment

競技規則は、プレーが安全に楽しめ、プレーする喜びを味わえるような、そして観客も観て楽しめるような試合を作り出すための枠組みを示すものでなければならない。いつも同じ楽しさが味わえるとは限らない、プレーヤーがスキルを駆使して質の高いボールを獲得し、そのボールを活用してプレーの継続を目指すことを可能にすることで、プレーする側および観る側双方の楽しさが増すことになる。

スペースの確保／報奨、失敗と罰則
Provision of Space/Rewards, Errors and Punishments

競技規則は、相手チームよりスキルフルにラグビーのスキルを駆使することができたチームに報奨を与えるものでなければならない。この報奨とは、最初のボールの争奪において、よりスキルフルなチームにボールとプレーの継続を維持するための時間とスペースを与えるということである。プレーを継続する中で、最も重要な点は、プレーヤーは立ったままでスキルを発揮しなければならないということである。グランドに倒れているプレーヤーはプレーできない。

スキルに対して報奨を与えるものである競技規則に違反したチームには罰則が課せられる。罰則のレベルは相手にどの程度の不利益を与えたかの度合いによる。これは基本的には、違反した側が違反をしていない側のプレーのオプションをどの程度減少させたかによる。

相手側の効果的なボールの活用を妨げることを意図して行われる不正なプレーや、極端な場合、相手側のプレーの継続を妨げるような不正なプレーには、最も厳しい罰則が課されなければならない。

罰則の段階

（ⅰ）アドバンテージルールの適用
反則をしていない側のオプションが減らないのであればアドバンテージルールを適用する。

（ⅱ）スクラム、ラインアウト
スキルが劣るために反則をした側やタッチにボールを出した側は、試合を再開するための権利を持つことはできない。

（ⅲ）フリーキック
ラインアウトやスクラムでの軽微な反則など、相手のオプションを制限するものではあるが直接的な影響がない場合をフリーキックとする。

（ⅳ）ペナルティーキック
倒れこみやオフサイドなど、ボールの争奪やプレーを継続させる場面で、相手のオプションを制限することを意図としたプレーに対しては、ペナルティーキックとする。

（ⅴ）ペナルティートライ
まさにトライを取られそうな場合に、トライを妨害することを目的とした行為に対してはペナルティートライを与える。

（ⅵ）退場処分
重大な不正なプレー、またはその後の不正なプレー、同じ反則を繰り返して行う場合などに適用する。

一貫／遵守／簡潔
Consistency／Compliance／Conciseness

競技規則は、一般的な根本原理を示し、また相互に首尾一貫した関連性を持つことが望まれる。一方、トップレベルのプレーヤーのプレーの質を向上させるために考案されたものであっても、すべてのレベルで適用できるような実用的なものであることが望ましい。

競技規則は、ラグビーの自然な流れに即したもので、プレーヤーが無理なく従うことができるようなものであるべきである。

競技規則は、表現および体裁などの点で容易に翻訳し理解できるような形で編纂されていることが望ましい。

ルールブックの普遍性　Universality of the Law Book

ラグビーの試合は統括団体であるIRBによって承認された1つのルールのもとでプレーされなければならない。年代別ラグビー（Age Grade Rugby）は、より高い安全性が求められ、それに対応するために競技規則のいくつかの点に修正を加えた統一的特別規則によ

り行なわなければならない。（日本ラグビーフットボール協会　2006～2007競技規則）

以上のように現在のラグビー競技規則は、ラグビー校で作られたフットボールのルールから163年という長い歴史の中で幾多の変遷を経て大きく変容している。

Ⅳ. 考　察

ルールらしいものや、レフリーも存在しないと言われていた民俗フットボールが、いつごろから、どのようにしてパブリックスクールの校庭でフットボールとして行われるようになったのかは明らかではないが、民俗遊びが学校（校庭）でも行われるようになるのは自然である。民俗フットボールでは、場所があまり限られず広々とした地域を利用し、ゴールも町や村の外れとされていたが、校庭では限られたスペースで行うためおのずとゴール間の距離を決めたり、実施する場所を限定しなければならない。当初は校庭の並木を利用して範囲を限定していたようであるが、民俗フットボールとは異質なフットボールを生み出すことになるのは当然のことと思われる。この様に民俗遊びから端を発したフットボールが少しずつルール化されスポーツ化されてパブリックスクールで行われるようになったのである。

ラグビー校では、アーノルド校長の指示を受けて1844年に、それまでは口頭あるいは実際にプレーするなかで伝えてきたフットボール・ルールの成分化に着手し、翌1845年にこれを完成し、さらに翌1846年にこれを改正した。この作業にはトマス・アーノルド校長の子息で17歳のW・Dアーノルド、16歳のW・Wシェアリー、そして法律に明るいF・ハッチンソンの3名があたり、原案を作成し、それを数回の生徒集会で討議、修正しつつ、8月28日の最高学年の集会で最終的に37ヶ条のルールを承認した。（中村敏雄、1995、スポーツルール学への序章　大修館書店　p 94）

このようにスポーツのルールは、それぞれのスポーツを愛好した人達が話し合う中で、「合意」することで成り立ってきた。1846年に改定されたラグビー校のルールの前文でも「以下のルールは、ラグビー校の出身者によく知られているルールについて説明するというよりも本校のフットボールに関して論議されたいろいろなことがらについて討議した結果をまとめたものである」と記されている。（中村敏雄、1995年、オフサイドはなぜ反則か　三省堂　p 109）

ここで注目すべき点は、アーノルド校長が、スポーツ、特に個人的な狩猟や射撃をやめて団体スポーツであるフットボールやクリケットを奨励したことである。アーノルドは、チームワークの大切さを重視し、協調性、責任感、献身、友情、同情、忍耐をはじめ、キャプテンに忠誠を尽くすことや、ルールを尊重させること、フェアプレーなど人格的な総合力を養おうとしたことである。ラグビー校のルールブックの最初に，決議として諸注意があげられている。ここで、「みだりに試合を欠席したものは処罰される。」ことや、「遅刻をしないこと」「ボールを絶えず追いかけること」「自己の労を省いて味方の戦力をそぐような行為をしてはならない」ことなどプレー内容よりも精神面の指導に重点が置かれていることがわかる。これらは現在の競技規則の憲章にあたるものでもあり、ラグビー精神が生かされている部分でもある。また、試合の結果などについて総ての論争・喧嘩などの裁決の全権を有するのは、チームの頭（キャプテン）、あるいはそれによって任命された代理人である。このように頭（キャプテン）に大きな権限を持たせていることも重要な点であり、現在のキャプテンシーにつながっている。

ラグビー校のフットボール・ルールでは、その当時の時代的背景からみても、あまり安全性を重視していなかったように見受けられる。当時のフットボールは荒々しさが特徴で

もあり、怪我はつきものであった。しかし、現在のラグビーフットボールでは安全性を重視することに力点が置かれていることから多くのルール変更がなされ項目的には22か条から成り立っているが細分化された内容は250ページに及んでいる。そのために観客もラグビーのルールはわかりにくいとよく言われる。だが、ラグビーのもつ肉体のぶつかり合いや激しいタックルなどの醍醐味や試合後のノーサイドの精神から生れる友情など、「ラグビー精神」はいまなお受け継がれている。プロ化により、勝つことが強いられ、ややもすると失われつつある「ラグビー精神」を取り戻し、真のラガーマンつくりに貢献したいと思うのは私一人であろうか、特に学生スポーツではアーノルドが強調したように教育的な配慮が必要であることを指導者は認識してもらいたい。

V. まとめ

ラグビー校のフットボールのルール化は、秩序を守り同じ学校や寮で生活する生徒の人格形成を目的に、チームワーク、協調性、責任感、献身、友情、同情、忍耐などをはじめとし忠誠を尽くすことや、ルールを尊重させる為に校長のアーノルドによって人格的な総合力を養うための教育的配慮のもとで行われたこと。そのために試合にのぞむ前にやらなければならないことが前文においてうたわれ自覚が促されている。そして試合では、フェアに戦うこと、また社会に出てリーダー的な存在に立つ者が養っておかなければならないキャプテンとしての権威というよりも、役割を経験することで養われるリーダーシップの養成にも重点がおかれたことなど、試合がうまく進行するということもさることながら、試合の中で人間力を養わせたことが特長としてあげられる。そして試合後はお互いを讃えあい友情を深める。こうしてノーサイドの精神が育成されるとともに、「ラグビー精神」が受け継がれてきたのである。1845年に誕生したフットボールのルールがラグビー校を中心に広まり幾多の変遷を経て現在につながっている。しかし、長年にわたりアマチュアスポーツとして受け継いできたラグビーがプロ化に踏み切ったことで、勝つことのみに重点が置かれ、「ラグビー精神」が薄れてきたことは、今後のラグビー発展に大きな汚点を残すことになる。たとえプロ化に移行されたといえどもこの「ラグビー精神」は大切に受け継がれたいものである。

本稿におけるラグビー校のフットボール・ルール翻訳に際し、御尽力いただいた本学外国語教育研究機構　教授　A・Sギブス先生に対しまして感謝の意を表します。ご協力有難うございました。

引用・参考文献

中村敏雄　1995a　スポーツルール学への序章　大修館書店　p 94
中村敏雄　1995b　オフサイドはなぜ反則か　三省堂選書　p 109
池田　潔　1949　自由と規律　岩波書店
鈴木秀人他　2002　スポーツの国イギリス　創文企画
中村敏雄　1989　メンバーチェンジの思想　平凡社
中村敏雄　1991　スポーツルールの社会学　朝日選書
日本ラグビーフットボール協会　2006　平成18年度競技規則2006～2007
野々村博　1983　ラグビー・ルール・ブックNo1,2,3　月刊ラガー
溝畑寛治　2007　ノーサイドの精神に学ぶ人間力　晃洋書房
A・S・ギブス他　2007　フットボール・ルール　ラグビー校
山本　浩　1998　フットボールの文化史　ちくま新書